



美 山 に て (1991年作)

品 角 小 文

井上甚太郎氏に聞く 中上林村の米よこせ闘争

語り手 井上甚太郎

(元綾部市議・元日農

京都府連合会会長)

聞き手 湯浅貞夫 (本誌編集部)

北原泰治 (泉隆親戚)

高橋さん (石川県泉隆研
究家)

湯浅 今日は、京都の農民運動

の父ともいべき泉隆さんの研究
家と御親戚の方をおつれしました
から、井上さんの闘争もふくめて
当時の農民闘争を語って下さい。

井上 御苦労さんでした。ここ
は昔、京都府何鹿郡中上林村字石

橋というところで、今は綾部市八
津合町石橋となっています。この

上林は口上林、中上林、奥上林、
と三つの村がありまして、北上す
ると若狭本郷、福井県ですね。大

飯原発のある所に抜けます。

高橋 井上さんが農民運動に入
られたのは。

井上 昭和二二年の春です。二
年四月、中国から復員し、青年

団活動を始めました。あとで京都
府連の副委員長をやりましたが、

この湯浅君などといっしょでし
た。その一方で農民運動をやった
わけです。

(文責 湯浅貞夫)
す。

この記録は昨年(一九九一)夏、逝
去された故井上甚太郎氏がまだ元気
でいた頃(多分一九八七年—昭
和六年の夏)私と石川県の人で泉
隆の研究をしている高橋さんと泉氏
の御親戚北原氏が、上林の井上氏の
自宅を訪問し、録音したものです。

戦後一九五〇年代の京都の農民運動
をリアルに語っていますので、本誌
に二回にわけて収録したいと思いま
す。

た 実は私は二年に社会党に入っ
た すが、これをやめて一四年

に共産党に入りました。その間に
農民組合ができ、農地改革や税金
闘争などで、雨後の筈のように組
合ができたんです。私の家は百姓
であったが、私は子供の時から絵
が好きやったので、絵の学校に行
きたかったんです。しかし親が
「都会に出したら帰らん。月給取
りになつたら百姓がつぶれる」とい
う父親の理論で、小学校から中学
校へいかんと青年学校に進みまし
た。「上みて暮すな下みて暮せ」と
いうことでした。これが戦後の青
年運動や農民運動に爆発したんや。

高橋 何年生まれですか。
井上 大正三年五月一三日。は
じめ農民組合といつても充分わか
りません。村へは太田典礼を呼ん
だし、永井健もよびました。太田
は当時共産党でしたし、永井は全
農の人でした。それと前後して泉
さんにも来てもらいました。昭和
二二年に泉さんにきてもらったた
が、綾部の加藤宗一さんのつなが
りです。この人は綾部で初めて共
産党の議席をとった人です。そ
の頃まだ日農は分裂していません。そ
こで、泉さんから、はじめて日本
農民組合というのを聞きました。

私等の村には全戸加入の農民組
合が結成されて全戸()〇名が入
り、村長も巻込んだ組合で農地改
革の闘争が中心でした。村委会長
の坂田勝蔵が会長で、あとで村長
になった波多野延三が書記長で
す。私は常任執行委員でした。

供米の割当がきましたが組合は
逃げました。ただ村に割当られる
段階で割当量を減らすことについ
ては一致しましたが、次々各戸に
村長が割当る時には対立しました。
そこで泉さんの話で全国組合に
入らんと具合が悪いということ
で、それまでは中立組合でした
が、それは党がなかつたからで
す。私は社会党の農村対策部長で
したが、青年団活動では京大の山
岡亮一先生、宮内裕先生、立命の
末川先生、細野先生等と交流があ
りまして、それで、昭和二四年に
なつて日本共産党に入つたんです。
当時はドッジ・ラインやつたか
いな、行政整理があつて、税制が
かわって地方税の中に固定資産税
ができました。

高橋 シャウブ税制ですか。
井上 いわゆる国税が村民税に
なり、国民の眼を国の税務署から
村の村長さんにむけさせるために
しよつた、と私は思っています。
昭和二十四年に税金申告、秋から
二五年の春にかけて闘争をやつた

んです。これは異議申し立ての闘争というものです。

私は共産党に入党し、三人で細胞をつくりましたが、泉さんに来てもらって公会堂で学習会をやり、異議申請の書き方を教えてもらいました。当時泉さんは日農京都府連の書記長です。更に細かいことは、西陣京極で喫茶店をやって、あとで湯の花で断食道場をやった……。

湯浅 松岡富士雄か。

井上 そう松岡のオッサンが来た。

湯浅 生活擁護同盟かな。

井上 松岡さんはアジテーターやった。二五年の税金闘争を成功させたんや。一人で六十年かかってボチボチ返したらよいのや。石井米蔵君なども六十年の口や。そして昭和二六年から供米闘争が始まっとたんです。

米を返せ

湯浅 それでは供米闘争の話を。

井上 京都七条新町の元木旅館で会議があつて、茨木良和、市川正一、泉隆さん中心に会議が行われたんです。その後の話しあが、市川正一が綾部に来たとき「甚さ

んか」というさかい「知らん人やなあ、だれやつたかいなア」というと「あほ言うな、一緒に会議やつたやないかいな」という。

市川さんは関西地方委員会に行つた。家内の兄の林一義は大阪府委員会に行つていたが、当時は皆んなペンネームをつかつていました。「良和、良和」といつていった。たしか、その場には奥田茂雄さんがいたと思います。

高橋 なぜペンネームにするんですか。

井上 当時はアメリカ占領下で

党は半非合法下やつたから、われわれも本名はわからなかつたな。

湯浅 私も泉さんの指導で農民組合統一派に関係しとつた。西本梅村で青年団もやつていたが、党が関西農民学校をやるからといふので、私の家に開設されたんですよ。昭和二六・七年頃やないか。大先生やウラブレ格好したんが次々とやってきて、半年位いたかなあ。上林貞次郎先生も来たし、市川さんも茨木さんもいっしょやつた。私の母が、この二人を大事に

…。上林貞次郎先生は東大、妹さんは府立医大、小児科の女医さんです。

湯浅 泉さんが指導して奥さんが、私にくらいついて昭和二七年の五月からついたんですわ。京都府下で市川貞次郎先生は大阪市も一番おくれている様に言われた

大の先生で私が出会った時、名刺を差し出すと開口一番「上林下総守の先祖のいた土地だ」といつた。それから宇治のお茶問屋の上林のおじいちゃんとともにその一統や。山六（山田六左エ門、あとで裏切る）の嫁さんも宇治の上林の娘さんやということやつた。

高橋 泉さんは当時、日農京都府連の書記長でしたか。

井上 そうです。奥田茂雄さんが書記でした。二六年頃です。

湯浅 奥田さんは元木旅館を根

城にして活動していました。二六年に分裂がありましたが、京都は統一派は安川房次郎でした。その下に泉隆さんがいたんです。主体性派は永井健でした。

井上 奥田さんは丹後の間人の海辺の人で、この町の収入役の息子。町会議員をやって党をつくつた人です。町長選舉に出て、負けた農民組合運動に入つたんです。

最終的には「二七年に供米を出しても、もし保有米が切れたら返します」という約束を取つたんです。割当があつても二六年産米は三高に入つて病氣で中退したんですが頭のよい人です。弟さんは東大、妹さんは府立医大、小児科の女医さんです。

湯浅 泉さんが指導して奥さんが、私にくらいついて昭和二七年の五月からついたんですわ。京都府下で市川貞次郎先生は大阪市も一番おくれている様に言われた

んで、日農中上林支部を結成したんやけど、それが一番進んどつてなア：ハハハア…。私は奥田さんの手紙も論文も全部残しています。

湯浅 奥田さんは汽車の中で手紙を書いたですからね。

井上 それからこの額、大山郁夫先生に書いてもらいました。これが何よりの証拠です。為日農中上林支部と書いてありますしやろ。

湯浅 立派なもんやね。ところで、供米闘争の本題に入つてもらいましょうか。

井上 二五年から二六年に最高潮に達しましたなア。村長の割当に対して、私の部落が全員集会を開いて、農民組合を中心に戸長を呼んで交渉しました。農業主事の波多野延三を呼んでつるしあげをしたんです。

湯浅 最終的には「二七年に供米を出しても、もし保有米が切れたら返します」という約束を取つたんです。割当があつても二六年産米は二七年になると五月頃から保有米が切れつて来ました。六月・七月には部落中が切れました。盆の米がなかつたんです。

そこで、泉さんが書記長、奥田さんがその代行して中上林村にベタつき、そしてむしろ旗を立てて

村の中央公民館の庭に集まり、炊き出しをし味噌汁と、にぎりめしを婦人会総動員でつくり、応援隊にもめしをだし大闘争になって来たんです。

私が昭和二六年に村会議員になりましたが、村会の議場一ぱいで何十本ものむしろ旗をおしてて村の人々が押しかけました。そして「米を返せ」という闘争です。

村長側は警察に連絡しようかと、うしろに立つておられた農民で一ぱいもむしろ旗をたてた農民で一ぱいも旗の柄がもう村会議員の背中にくつついていました。「凶器」みたいなもんや、ハハハハア…。村会議員は十六人いましたが、椅子の後で竹の棹でガタガタ床を突き「米をかえせ!!」「米をよこせ!!!」などなりました。

そこへ何十人かの警察が入ってきた。村長は傍聴規則を見せなかつたが、警察はおそいかからうとしたが、結局は発動はなかつた。村長が止めたんやな。
それから綾部の府事務所に陳情に行くことが決議されたんや。
「井上議員はきてもらわんでよい」と言うことやつたが、ちよう

ど道路工事中で、バスがなかつたので皆んなトラックに乗つて綾部へ行つたんや。私は走つていつて

トランクにおいつき裏から飛び乗つたんや…。

湯浅　まるで映画やな…。

井上　中には村長が乗つてゐる。うしろには経済課長やらが乗つとつた。「だれや、だれや」というと。経済課長は良心的な人で「井上君こっちへこい、こっちへ」といって場を開けてくれた。トランクが綾部につく。私は綾部の地方事務所に到着するとポンとおりた。村長は「どこから来たんや」とビックリしどつたわ。

京都府河鹿事務所長は福田和一というたが、気をきかして皆んなに丼を出したんやね。私は「上林ではめしも食えんとまつとるのに、こんなもん食えるかい!!」とバーッと丼をぶんなげたんや。

(一同　ほう……。)

府庁に乗り込む

井上　今度は京都府の府庁に行つたんや。鶴川知事に会わせると、いうわけや。村長や地方事務所長あたりでは埒があかん。知事に直接交渉せよという方針が出たんや。持団体の人々も一緒やつた。

高橋　上林からは何人位でしたか。

井上　村から十五、六人やつたかな。泉さん、井上武夫衆議院候補になつた人、中内広府会議員らも來てくれた。奥田さんも勿論や。昼から府庁に乗り込んだ。知事はおらんというわけや。鶴川さんとしても弱つたんやろうな。

わしらは知事に会わすまでは帰らんぞ、と動かなんだ。秘書課の部屋は一杯や。これも写真があるんやがな。

夜の八時になる九時になる、十時。当時の秘書課長はあとで副知事になつた…。

湯浅　松尾賢一郎やろ。

井上　そうや松尾やつた。もう

十時になる。中内が頭にきて言ひだした「新聞記者を全部呼びなさい」。松尾課長が「何ですか」。「日本に一人しかいない鶴川知事が行方不明になつた。あしたの朝刊に全部書かさないかん」。する

と秘書課長「まって下さい。さがして来ます」。泉さんは、おとなしい人やつたが、「そうや、そうや、それがよろしい」という。中内は府会のハリ切りボーキの代表みたいやつたが、「私は警察委員やから」といいだす。すると松尾

が「さがしてきます」。「なに、おまえも逃げる氣か」とどなる。

「お前が鶴川さんを本館から引っぱり出してしまんやろ」。とうとう十二時になつた。秘書課長は「もうこらえて下さい」という。

秘書課の職員は、隅つこの方に全員、女の職員も缶詰。夜中の二時頃になつて松尾が「責任をもつてさがします」という。「付いていけ」とどなる。結局、付人はこらえてやる。ということとなり、秘書課長が知事にあわすようにする

書課長が知事にあわすようになることになつた。

皆んなは秘書課の机の上に寝そべるものと、とうとう夜明かししてしまつた。

朝になつてきた。掃除のおばさんがやつてきて、「のいておくれやす」。新聞紙を敷いて廊下に寝るものや、腰板にもたれるものや、「もうこうなつたら腹をすえようかい、まとうかい」となつた。そして出勤時間となつた。隣の小川公室長の部屋のドアが一寸

あいて、そのすきから松尾の顔がのぞいた。「それ行け」ということで、小川公室長の部屋になだれ込む。「まって下さいよ。まつて下さいよ」と公室長。それでも結局は知事に会わさんだなあ。

泉さんは紳士やつたが、奥田さんはつぎのあたつたズボンに黒い手拭をさげ、はげ頭から湯気を立てて「イエイツ」とやるものやから汗をかいて、これを手拭でふきふき、しぶるもんやから、きたない汗が流れたのを、おぼえていますわ。

湯浅 それは夏でしたか。

井上 米かえせは、端境期やから夏や、七月や。それで京都府としては、とうとう、最後の手とし

宮西直輝著

『青春の選択』 読後感

村中嘉明

宮西直輝さんは一九一四年生まれで、少年時代から階級闘争の渦の中に巻き込まれて、散々苦労をかさねてこられた方であり、プロレタリア文学に夢を持っておられ、文化活動や創作・評論活動をなされて来られたが、案外目の出ない不遇の方だったと思います。

私も一九一四年生まれで、十六才の頃から『戦旗』を読んだり日本労働組合全国協議会の末端組織に所属したりして、父母や兄弟に心配をかけた経験の持ち主なので、共通点が多いので『青春の選

「物語」と題して、主として京都における活動記録を自費出版すると真先に評価して下さったのは宮西氏だった。氏は現在京都市に住んでおられるが、活動されたのは大阪府下の堺市や大阪市内だった。私も大阪市内の大正区に六ヶ月ばかり消費組合の労務者だったことがあり、和田四三四氏や吉見光凡氏の多数派や重建共産党の事情は少々理解していますが「青春の選

て、年度用に確保していた精米機を何鹿事務所のものを一石六斗放出したんや。これを米になると半分になります。それをちいどずつわけたんや。この部屋が米つきをした部屋や。うちの作業場やつた。わしが初めて精米機を置いてやった所や。粉をすって一升ずつ分けたんやが、皆んな涙をこぼしな。喜んだ。本当に忘れられんですなア。これで盆をさしたんです。

〔以下
次号

また、昨年亡くなられた森山啓先生の戦前の作品を高く評価されておられるので、私は、私自身と共通点が多いので驚いています。但し、私は残念ながら、宮西さんのように文才はありません。

宮西氏とは戦後、東京の運動史研究会の例会が、京都市内であつたときに、一、二回会っていますが、一昨年だったか、大阪の帰りにちょっと話し合ってみたくて、京都駅で待ちあわせた際に、私は宮西氏の風貌に接したときとさに「この人は非合法活動には満しない」人だと直感的に感じました。背丈が高く尾行するのに恰好のスタイルなので、氏は地下活動には適しない、文学に専念されてよかったです。

と申しますのが、戦前昭和七年の九月三日事件で検挙された、清水焼の絵描きだった加藤八十八氏に、西陣署の特高係の「山長」と山本長?巡回部長が、加藤に転向をすすめた際に、加藤氏がビックだつたので、その体では非合法運動は適しないからと指摘されたので、氏はその後絵を描くことに専念されたときいているので、宮西氏もプロ作家になろうと努力さ

本会の会員として、会の活動に参加して下さっていた西村幸雄氏(四月五日、享年七十四才)、浅井清信氏(四月七日、享年八十九才)が、相ついで逝去了されました。西村氏は立命館常務理事として、戦後立命館大学の民主的発展に大きな足跡を残されました。昨年六月二一日、本会の総会に出席され、「社会主義の今日をめぐつて」の討論にお元気に発言されていました(「燎原」81号、一・八・二〇)。浅井氏は立命館大学、龍谷大学で教授として労働法の研究と教育に大きな仕事をされ、また永年日ソ協会京都府連会長として活動されました。両氏のご逝去に対し心より哀悼の意を表します。

無神論者同盟について再論

五辻英一郎

戦前の無神論者同盟の生き残りという事で、湯浅さんの『目で見る京都の民主運動史』で紹介されたことから、奥田先生の御苦労で『燎原』誌に出して頂きましたから、いささか責任を痛感いたしまして、一時は神を信じますと誓った私が、手の平を返して無神論へ、反宗教へと、移って行った事に就いて、もう少し述べさせて戴きたいと思います。

子供の時、日曜学校へ行く時は（大正の初）、硬貨一枚母にもらって献金し、オヤツや本をもらつてクリスマスともなれば抱え切れ思つていました。小学校を出て丁稚に行つてから、近所に救世軍があつたので話を聞きに行き、やがて体が大きくなつたので夜万灯をかざして歩いたり大太鼓を叩いて歩いたり、歳末ともなれば「慈善鍋」の服で道行く人々にカンパを呼びかけたりもしました。

京都へ来てからも、あまり友達

のないままに、近くの洛東教会へ行って、讃美歌を歌つたり、聖書研究会に出たりマルチナルーテルの事を研究したりしているうちに、社会・政治の矛盾や上海事変・満州事変と大陸侵出が激しくなり、軍国主義のいやが上にも拡大されて行く前に、あまりにも無力な宗教活動にウンザリして、イエスもルーテルも体を張つて正義の為、良心に従つて時の権力と闘つたのに、今の宗教は何とだらしない事かと思い、そもそも組織された宗教・教団に問題があるので

はないかとの疑問を持ち、幸い若かった谷山牧師としばしば話し合ひ、独身だった牧師の家で泊り込み食事を頂いたりしながら大きな話を込んだものでした。

哲学者西田幾太郎先生が「善の研究」で引っかかり、滝川教授が「刑法読本」で大学を追われた一夫多妻が問題になり十六人も妾があつたという、明治天皇の江戸城大奥そのままの生活の事が、よしなば當時一般社会人の須知の事実でも、時の権力にとって都合が悪かつたり権威にかかるというか現代の宗教のあり方などについて大いに論議するようになり、佛

教（達とのつき合にもなった訳）で、昨年亡くなられた、私より一年上の細井友晋さんも、若い日名古屋で「戦無」を知り、その影響も受けたと云われた由、聞いた事があります。

無神論という事で、特高ににらまれ「信じる信じまいはお前等の勝手やが、戦闘的とは何事か」とある」と部屋中家中ガサつたあげ句、額まで下ろして裏をあけ、中身を引きちらかすの乱暴狼藉、果ては郷里の警察へ連絡し親爺を呼びつけて「アカはヤクザより劣りや人間の屑や」と怒鳴りつける。頑固でも律儀で通つて居た親爺をして「息子もお上にさからつて、お尋ね者になつてしまつたわ」と嘆かせた。

哲学者西田幾太郎先生が「善の研究」で引っかかり、滝川教授が「刑法読本」で大学を追われた一夫多妻が問題になり十六人も妾があつたという、明治天皇の江戸城大奥そのままの生活の事が、よしなば當時一般社会人の須知の事実でも、時の権力にとって都合が悪かつたり権威にかかるというか現代の宗教のあり方などについて大いに論議するようになり、佛

で、昨年亡くなられた、私より一年上の細井友晋さんも、若い日名古屋で「戦無」を知り、その影響も受けたと云われた由、聞いた事があります。

無神論といふ事で、特高ににらまれ「信じる信じまいはお前等の勝手やが、戦闘的とは何事か」とある」と部屋中家中ガサつたあげ句、額まで下ろして裏をあけ、中身を引きちらかすの乱暴狼藉、果ては郷里の警察へ連絡し親爺を呼びつけて「アカはヤクザより劣りや人間の屑や」と怒鳴りつける。頑固でも律儀で通つて居た親爺をして「息子もお上にさからつて、お尋ね者になつてしまつたわ」と嘆かせた。

哲学者西田幾太郎先生が「善の研究」で引っかかり、滝川教授が「刑法読本」で大学を追われた一夫多妻が問題になり十六人も妾があつたという、明治天皇の江戸城大奥そのままの生活の事が、よしなば當時一般社会人の須知の事実でも、時の権力にとって都合が悪かつたり権威にかかるというか現代の宗教のあり方などについて大いに論議するようになり、佛

で、昨年亡くなられた、私より一年上の細井友晋さんも、若い日名古屋で「戦無」を知り、その影響も受けたと云われた由、聞いた事あります。

無神論といふ事で、特高ににらまれ「信じる信じまいはお前等の勝手やが、戦闘的とは何事か」とある」と部屋中家中ガサつたあげ句、額まで下ろして裏をあけ、中身を引きちらかすの乱暴狼藉、果ては郷里の警察へ連絡し親爺を呼びつけて「アカはヤクザより劣りや人間の屑や」と怒鳴りつける。頑固でも律儀で通つて居た親爺をして「息子もお上にさからつて、お尋ね者になつてしまつたわ」と嘆かせた。

哲学者西田幾太郎先生が「善の研究」で引っかかり、滝川教授が「刑法読本」で大学を追われた一夫多妻が問題になり十六人も妾があつたという、明治天皇の江戸城大奥そのままの生活の事が、よしなば當時一般社会人の須知の事実でも、時の権力にとって都合が悪かつたり権威にかかるというか現代の宗教のあり方などについて大いに論議するようになり、佛



なられました。理論的に筋の通ったものをお持ちになつた事と思いますが、私は職場に戻つて腕に自信をつけようと努力しました。一人前の職人にはなりましたが、事業を進めようとすると、税金で苦しめられ、それ等の鬱いのあけくれの中でとうとうこの年令になつてしましました。

頑固でも律儀で信心家の親爺も晩年に「わしもよう、お説教を聞きに行つたもんやけど、何でも感謝謝言うてたら、しまいには頭から小便かけられても、有難うございます、温うございました、てなことになるなあ！」と言いました。「お釈迦さんは、ぼろぼろの衣に継ぎはぎだらけの袈裟かけて旅をしてはつた。今の坊主の立派な衣や袈裟を見やはつたら、これ何んや、お前ら何しとんのや、と言わはるにちがいない」。

故大西良慶師の声がする様な気がします。

(九一・九・一五日記)

苦しめられ、それ等の鬱いのあけくれの中でとうとうこの年令になつてしましました。

事業を進めようとすると、税金で苦しめられ、それ等の鬱いのあけくれの中でとうとうこの年令になつてしましました。

弔辭 北川鉄夫先生の訃報に接し

北川鉄夫先生の訃報に接し心から哀悼の意を表します。

小生

北川先生とは一九四〇年後半からの御交誼をたまわり、色々と御指導いただきました。特に京都における戦後の文化運動・地方演劇活動での御指導は忘れられない思い出です。この事は当時演劇雑誌『テアトロ』にも書いていた

だいたし、又最近、私共の京都の民主運動史を語る会の機関紙『燎原』にも御寄稿いた

だいたところです。

北川先生は戦前、右翼の凶刃にたおれた山本宣治さんの「山宣葬のうた」を作詞されましたし、戦後は京都の新劇運動の創始者の一人でもあります。また後年は東京に住まわれて部落解放運動の正常化のために御活躍いただきました。

北川先生の一貫した御姿勢と民主運動で果たされた御功績は実に大きいものがあります。

今、私達にとっての大先輩であり恩師ともいえる先生と永遠のお別れをしなければならないのは、極めて大きな痛恨事であり、誠に残念なことです。

私は先に、親交のあった大映の元映画監督・大映労組の委員長であった佐藤春人さんをうしないましたが、今年は大変心さびしい夏であります。

私は先に、親交のあった大映の元映画監督・大映労組の委員長であった佐藤春人さんをうしないましたが、今年は大変心さびしい夏であります。

私は先に、親交のあった大映の元映画監督・大映労組の委員長であった佐藤春人さんをうしないましたが、今年は大変心さびしい夏であります。

私は先に、親交のあった大映の元映画監督・大映労組の委員長であった佐藤春人さんをうしないましたが、今年は大変心さびしい夏であります。

おりおりに

二条 静子

八十年の疲れと云うか足すらも
我にそむきて歩みがたかり

眠られぬ息苦しさに堪えつつも
波頭越えよとむがきつゝいる

公園の春たけなわ桜の間に樂を
かなづる子供の群れ

ゆらゆらと影絵の如くゆれている
春陽まばゆき樹々の枝

煩惱を絶ち得し人の様に似る
公園の樹木の高く静けさ

会や本誌のことについて
ことを御靈前にお誓いし追悼の言葉とさせていただきま

す。

私は、先生の遺業をひきつぎ、民主的文化の発展のため及ばずながら努力を続けることを御靈前にお誓いし追悼の言葉とさせていただきま

す。

私は、編集部担当の奥田修三

（宇治市広野町寺山一七一二五七）湯浅貞夫（京都府船井郡日吉町保野田）の両名のいざれかにご連絡下さい。

『燎原』編集部 湯浅貞夫
一九九一・五・二〇

